

矢 上町で大正八年に創業した「かわら畳店」。この店の三代目が川良武徳さんだ。高校卒業後、京都で修行を積んだ川良さんが実家を継ぐ決意で帰郷したのは、二十七歳の時のこと。畳というのは一見するとどれも同じように見えるが、その作り方は職人によつて様々だという。川良さんも父親とはやり方が全く違ったと話す。そのお父さんも帰郷後、五年後に亡くなった。「父にはのんびりしたところがありました。昔はいい材料が手に入っていましたから、じっくりと仕事に向き合っていました。それが職人として羨ましいと思いますね。私の場合はどうしても時間に追われ、せかせかしてしまいますから」。朝運んできた畳を急いで張り替えて夕方には納品……川良さんにとつてそんな一日は珍しいことではない。

それでも「永く使ってほしい」という気持ちを含めて手を動かす。い草の香りが漂う作業場では驚くようなスピードで仕事が進められていく。そこには迷いは一切感じられない。「お客様は「昔からあるあの店なら大丈夫」だと思って依頼してください。だからいい加減な仕事はできないんですよ」。三代目は老舗ならではのプレッシャーとも闘っていた。

川良さんはここ数年、大きな危機感を抱いている。和室離れが進み、今やなんと畳を知らない子どもたちがいるというのだ。川良さんはそんな子どもたちにい草や畳の伝統文化を伝えることも自分の仕事だと考えるようになった。

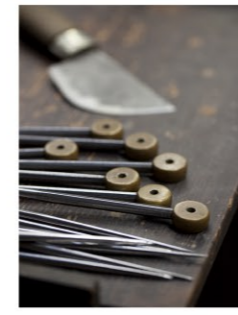
また和室離れに比例するように、い草を栽培する農家が減少の一途をたどっていることも大きな不安材料だ。国産のい草の生産量が落ち、中国産の輸入量が増えるのは品質低下を招くだけでなく、日本から畳文化がなくなる前兆ともいえる。このままい草農家がなくなれば、畳職人の仕事もなくなってしまう。川良さんは昨年十一月、広島の農家を訪ねた。「高齢化が進むい草農家の現状を目の当たりにし、ますます危機感を強めました。この現状をどうにかしたい。これから何ができるのか、自分なりに考えていきたいと思っています」。その言葉は、腕を磨くだけでなく、日本の誇るべき伝統を守ることも畳職人の使命であることを語っている。

だが、川良さんには全く気が負いが感じられない。どちらかと言えば「いま自分がやれることをやる、ただそれだけ」と飄々としていた。その川良流の職人魂こそが畳文化の道を照らす一筋の光のように思えた。

畳職人

川良武徳さん

Takenori Kawara



かわらたけのり
1967年、長崎市矢上町生まれ。畳一級技能士。高校卒業後、京都で修行し、27歳で帰郷。現在、「かわら畳店」の三代目として日々奮闘している。古いものが大好きで、店舗内にはまるでカフェのようなアンティークスペースも併設。畳店のイメージを一新し、地元でも注目されている。

かわら畳店
長崎市矢上町9-19
TEL.095-838-3736
かわら畳店 検索



日本から畳文化が
消えないように、
自分ができることをやるだけ。